

ニコライ1世期ロシア帝国のアジア外交 —外務省アジア局および地方総督の役割を中心に—

Nicholas I and his Asiatic Diplomacy:

A Focus on the Roles of Asiatic Department of Foreign Ministry and Provincial Governor-Generals

H30助入11

代表研究者 塩谷哲史 筑波大学 人文社会系 助教

Akifumi Shioya

Assistant Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences,
University of Tsukuba

This research aims to clarify the process and the basic principles behind the expansion of the modern state system into Asia through Russia during the reign of Nicholas I (1825–1855), when Russia was one of the five major powers in the Post-Napoleonic European Regime (Vienna System). The research deals with the question of how the Vienna System affected the reorganization of Russia's relationships with various Asian countries and regions, especially the Qing dynasty and the Inner Asian khanates. My research addresses these gaps in the literature with additional empirical research. In this research project, I examined Russian diplomacy toward Asia during the reign of Nicholas I, while paying attention to the roles of the Asiatic Department and the governors-generals in the peripheric regions of the Empire. My proposed research project clarifies how the central government, local governors-general, and other diplomatic organs such as the Asiatic Department deliberated and decided on foreign policies and finally obtained the emperor's authorization, and it describes the diplomatic principles behind these decision-making processes based on readings and interpretations of correspondence between the staff of the Asiatic Department, the ambassadors at the time of negotiations to conclude treaties with Asian countries and regions, and governors-general in peripheral regions of the Russian Empire, who maintained their autonomous status in the peripheral provinces bordering Asian countries and regions. I identified as my target area of “Asian diplomacy” the jurisdiction of the Asiatic Department, from the territory of the Ottoman Empire to Iran, the Caucasus, Central Asia, the Qing dynasty, and Japan.

研究目的

本研究は、ナポレオン戦争後のウィーン体制下において、条約にもとづく近代国家体系の枠組みがヨーロッパからアジア諸国・地域へと拡張されていった過程で、五大国の1つであったニコライ1世期のロシアが、アジア諸国・地域との関係をいかに再編させていったのか、そ

の背景にあった基本理念とは何であったのかを明らかにすることを目的とする。そのために、帝国中央政府およびアジア国境地域の地方総督とアジア諸国・地域との交渉過程に注目しながら、その外交政策の実態とそこに通底する理念を解明する。

ニコライ1世期のロシアのアジア外交のあり方を問うことは、単にロシアの過去のア

ジア外交のあり方を解明するだけにとどまらない。すでにCannady, S. and P. Kubicek (2014) “Nationalism and Legitimation for Authoritarianism” は、ニコライ1世と現ロシア大統領プーチンの政治体制、ナショナリズムの活用法の共通点と歴史的連続性を論じている。本研究の成果は、北方領土問題に対する独自の歴史観、シリアを中心とした中東への介入およびクリミア領有に関する強硬な主張が見られるプーチン政権の外交論理の根拠を考える上で示唆を与えるものとなるだろう。

概 要

ニコライ1世(在位1825-1855年)治世下のロシア帝国は、ナポレオンの侵攻を退け、その開明的な性格が知られたアレクサンドル1世(在位1801-1825年)と、大改革を主導しロシアの近代化に尽力したアレクサンドル2世(在位1855-1881年)の治世の間にあって、国内では専制の強化による反動と社会の停滞、国外では「ヨーロッパの憲兵」として自由主義を抑圧したイメージが強かった。またこの時期のロシアの外交史研究は、五大国をなした英仏普墺を中心とするウィーン体制下の諸国との関係に関心を集中させてきた。

しかしニコライ1世の治世には、ロシア帝国崩壊まで実効力を持った法律大全(1830年)、帝国法典(1833年)、会社法(1836年)が公布・制定され、首都サンクト・ペテルブルグとモスクワを結ぶ鉄道が建設(1851年)されるなど、専制の枠組み内でありながら、国家体制の整備、国家による社会の編制が図られるとともに、産業革命が始まり、交通インフラの整備など社会活動の基盤の変化も進んだ。また対外的には、1832年までに外務省が整備され、英仏普墺といった西欧列強との間の会議外交を専門的に支えた。さらに外務省アジア局の管轄

のもと、オスマン帝国、ガージャール朝イラン、中央アジア諸ハン国、清朝、日本と、自由貿易の要素を取り入れた通商条約を締結し、20世紀に至るこれらの諸国・地域との新たな国際関係の基盤を構築した。

本研究では、ロシア連邦モスクワ市に所在するロシア帝国外交政策文書館(AVPRI)を中心に、外務省を中心に展開されたロシア帝国とアジア諸国・地域との交渉に関連する史料(訓令、相手国・地域の君主からのロシア皇帝に宛てられた書簡、ロシア当局者の手になる往復書簡、報告書、日記など)が所蔵される、ジョージア国立文書館(TsIAG)などで調査を行った。また代表者が本研究プロジェクト以前に収集していたトルコ共和国総理府文書館所蔵の史料などとの内容の突き合せも行った。

その結果、ニコライ1世期の対アジア諸国・地域との対外交渉においては、一方で西欧列強の中では友好国であるイギリスとの協調を維持するため、アジア諸国・地域との交渉においても、イギリスの利害に抵触する際には、直ちに同国への協力を表明していた。しかし同時に、アジアへの海洋進出を強化していたイギリスが、とりわけインド、アフガニスタン、イラン経由で中央アジアに進出する可能性に対する警戒および競争心は、政府内で共有されており、それはアジア諸国・地域との交渉の際にも発揮された。そして条約にもとづく新たな関係構築の際に、ロシアとアジア諸国・地域との相互関係の間には、条文の理解や条約そのものの意義をめぐる齟齬が生じるようになった。

ー以下割愛ー